

第 562 回 放送番組審議会

1. 日 時 2020 年 4 月 21 日 (火)

2. 開催場所 新型コロナウイルス感染拡大防止のため書面会議

3. 委員総数 8 名

出席委員 8 名

委員長	大橋 綾子
副委員長	佐藤 健志
委員	加藤 千晶
委員	渡辺 理雄
委員	前田 千香子
委員	石田 亨
委員	柿木 康孝
委員	越沼 洋一

欠席委員 0 名

社側出席者	榎野 信治	(代表取締役社長)
	青山 尚之	(専務取締役事業局長)
	畑山 篤	(取締役編成局長 兼 報道制作局長)
	池田 学	(取締役経営企画局長 兼 技術局長)
	桑島 広実	(報道制作局次長 兼 制作部長)

事務局	小岩 祥子	(編成担当局長)
	黒澤 星	(編成局編成部)

4. 議 題

①3/29(日)16:00～16:55 ネイチャリング SP

「熊を狩る人 ～山の恵みに生きる岩手のマタギ～」

②その他

5. 資 料

① 自社制作番組放送スケジュール(2020年4月21日～2020年5月18日)

2020/04/25(土) 10:00～10:30 支えあって生きる

～地域共生社会の実現のために～

2020/04/25(土) 16:00～16:55 怪物王国 岩手と剛速球の謎

2020/04/26(日) 16:25～16:55 快適住宅見学隊

② 視聴者からのご意見(2020年4月分)

③ 週間番組種別放送時間報告(2019年10月期)

6. 意 見

委員側意見

- 「マタギ」という言葉は聞いたことがあったが、所謂猟師のことだろうと思っている程度で、実際にどのようなことをしているのかは、詳しくはわからなかった。それをよく理解できる内容だった。
- 始めに岩手県内の熊の生息数、熊による農作物の被害、駆除数、猟師の数などの全体像の説明があれば良かった。
- 今回取材した人々は、伝統的な猟法の一つである「穴熊猟」を行い、熊への畏敬の念を持ち、獲った熊を大切に利用する、という狩猟をしていて、趣味的な狩猟とは違う、マタギの信仰や習俗を受け継ぐ人々であると思った。現代の岩手におけるこのような人々の姿を映し出すことは、とても意義のあることだと思った。
- 熊を撃って大部分の収入を得て生計を立てた昔のマタギとは違い、今回登場する「マタギ」は番組では描かれませんが、クマ猟が主な収入を得る人たちではないのではないかと。そこに違和感を持った。
- 番組に登場した方々は熊猟が生業ではないと思われ、サブタイトルにある「山の恵に生きる」はやや大げさな表現に感じたが、ナレーションでは「現代のマタギ」としていたので、実際の熊を撃ち、険しい山道を追う映像からは緊迫感が伝わり、生業でなくとも命の危険を冒して熊猟を行うことが、ある意味で山に命をあずけ生きている事だと感じとった。
- マタギ、熊猟師、熊との共生等、様々な切り口、テーマがあったと思うが、今ひとつ絞り切れていない感じがした。何を一番伝えたいのかわからないというのが、全体的な印象だった。
- 番組で違和感があったのは、山奥深く潜んでいる熊を叩き出してまで捕らえる必要があるのか、逆に熊の生存を脅かし生態系を壊すのではないだろうか、という点だった。
- 途中から、ジビエ料理や、リンゴ農家の被害対策、ハンターを目指す若者育成、と進むうちに、番組が最初に伝えようとした(タイトルの「山の恵みに生きる」に込めた)想いからは、少しずつれていってしまった印象を持った。

局 側 意 見

- 複数の委員からご指摘を頂戴し、おそらく視聴者も最も違和感を覚えたであろう点が、「取材をした3人の猟師はマタギなの？マタギではないの？」という点ではないかと思う。狩猟を生業とするのが「マタギ」であるならば3人は間違いなくマタギではないが、番組では岩手の猟師たちが今もマタギの精神性を受け継いでいる事をテーマとして伝えたいと考え、「現代のマタギ」と記号化した彼らの猟の様子を映像で紹介した。
- クマの解体シーンについては、「命をいただく」「山の恵みをいただく」という、マタギの精神性から生まれたしきたりが今も残っていることを表す象徴的なシーンだったので放送で使った。視聴者がショッキングな思いをしないよう、弊社の考査も映像をチェックし、生々しいシーンはできるだけ控えるようにした。今後も局内で多くの意見を交わし、視聴者への配慮を十分心がけていきたいと考えている。

7. 審議機関の答申または意見の概要を公表した場合におけるその公表の方法

- ①テレビ岩手本社での備え置き
- ②読売新聞への掲載(別添)
- ④自社 HP での掲載 <http://www.tvi.jp/banshin/index.html>